

外国出身者の社会参加とホスト社会への働きかけ ～母語・母文化を生かした多言語活動の実践をととして～

芳賀洋子

(地球っ子グループ・多文化多世代のあそび舎てんきりん
埼玉県地域日本語教育コーディネーター)

要旨

私たちは、地域の対話型日本語活動を通して外国出身者との学びを楽しんできた。多様な言葉・文化の中に共通点を見つけた時は素直に嬉しいものである。同じってうれしい！から出発すると、違いはとても楽しいものだった。一方、ここで出会う外国出身者は、日本語が話せる人もそうでない人も、日本社会に合わせようと努力しているせいか自分らしさを抑え込んでいるようで本来の力を十分発揮できていない。

さらに日本社会を見ると、多文化共生が唱えられて久しいにもかかわらず、外国人と日本人が触れ合う機会さえ少ないため隣人としての理解が進まない。

そうした中、外国人自身の力を生かして多言語活動を楽しむことで互いの距離を縮めるのに役立てたい。

本稿では、そうした思いから、多言語おはなし会と日常の多言語活動の実践を紹介し、外国出身者のエンパワーメント、日本人側の理解、地域社会への働きかけを軸に、その双方向の作用を考察していく。

キーワード：母語・母文化 アイデンティティ 地域参加・社会参加
エンパワーメント ホスト社会への働きかけ

1. はじめに

地域で日本語ボランティア活動をしていると、番組や記事を書きたいメディアの方、論文を書きたい学生の方などから外国人へのインタビューの依頼が来る。筆者らには、一緒に活動している外国出身の仲間がいるからいつでも紹介できるが、近年は、紹介することを躊躇するようになった。というのは、ほぼ間違いなく「困っていることは何ですか？」という質問があり、仲間の外国出身者が自分の経験を掘り起こして答えたことが記事になる。日ごろ協働して活動している彼女たちが、支援を必要とする存在として記事になることを避けるためにあらかじめ注文を付ける。しかし、外国人は困っている人、外国人は支



援される人、という図式はかなり強固に日本社会に根付いているらしく、筆者らの意図が伝わっていなかったと感ずることが度々である。

筆者らと活動をともにしている人たちは、多様な能力と魅力を持つ人たちである。ともに楽しい地域の活動を作り出し、必要があれば相談し合える仲間である。ある時、支援団体が集まる会議の中で支援という言葉が頻繁に出るのを聞いて、「支援」の前に「理解」が必要だと気づいた。支援する人と支援される人の固定からは対等な関係性は生まれえない。互いに理解し合うことこそが対等の関係を生み出すはずだ。外国人＝支援の必要な人という捉え方は、日本社会側が、外国出身者の事実を正しく理解していない、知らないということから生じている思い込みではないか。正しく知るためには、両者が活動や場を共有することが何よりも大切であるが、その場が少ないのが現実である。外国ルーツの人たちと関わる私たち日本語教育関係者には、こうした日本社会側の理解を促す社会的役割があると感ずてきた。そして、それには、ともに活動している仲間の外国出身者が持っている本来の力をエンパワーメントし発信してもらうことが有効であるということ、私たちの実践を通して社会に伝えたい。

筆者らは現在、地球っ子グループとして活動しているが、ここでは、参加する外国出身者の母語・母文化を大切に、日常の活動に取り入れて来た。そこから編み出された多言語あそびなどを多言語活動と呼び、それを、外国出身者を主役とする「多言語によるおはなし会とワークショップ」（以下、「おはなし会」）という形で企画し、2008年より図書館等で実施してきた。この取り組みは、彼らが自国で身に付けて来た母語・母文化を生かして日本人および日本社会に働きかけ変容を促し、共生社会を作っていく啓蒙の力を期待できるものである。すなわち、外国出身者とその子どもにとっては自分たちのルーツについての自己肯定感を取り戻すきっかけとなり、おはなし会の観客である地域の人たちにとっては一緒に楽しむことで新たな気づきと理解の機会になるなど、双方向の効果が期待できるものである。

本稿では、「おはなし会」と、こうした多言語活動を編み出した日常の地域の日本語教育活動の実践を合わせて報告する。その上で、これらの多言語活動によって、外国出身者のエンパワーメント、日本人側の気づきと理解、さらに日本社会の変容という課題に対して、どのような効果を生み出しているかをそれぞれの語り（感想）を通して示す。さらに、外国出身者自身の力を生かしたこの活動を外国出身者の積極的社会参加という視点から問い直し、多様な背景を持った人々が共に暮らす住民であるという社会的理解を広めるための啓蒙活動への期待を示し、広く学校教育、日本語教育、社会教育に活用する足掛かりとしたい。

2. 地球っ子グループの成り立ち

地球っ子グループは、地球っ子クラブ 2000、多文化子育ての会 Coconico、多文化・多世代のあそび舎てんきりんの3つから成る（図1参照）

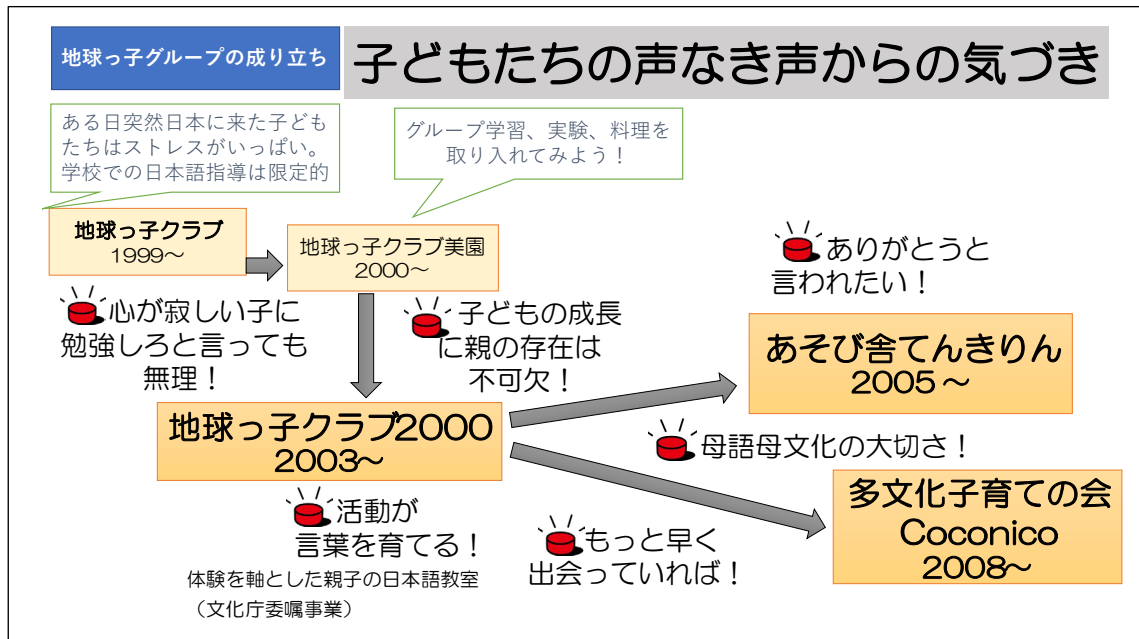


図1 地球っ子グループの成り立ちと経緯

2000年に、筆者を含むさいたま市の日本語指導員3人で、外国につながる子どもたちのための地域の日本語教室を立ち上げた。現在の地球っ子クラブ2000の前身である。集まった子どもたちは、学校から解放され同じ境遇の仲間と出会った嬉しさと勉強どころではなく、私たちは、心が安定しない子に勉強しろと言っても無理！とすぐに気づいた。また、おやつにホットケーキを焼いた時には、生活に結びついた活動の中で実感のある言葉が身につくものだと言われた。それらの気づきを経て、2003年に体験を軸とした親子参加型日本語教室・地球っ子クラブ2000（以下、地球っ子クラブ）を設立。以後、参加した外国出身の親子と体験や学習を共にしながら、その時々に取り取った気づきを形にしていくなかで、「多文化子育ての会 Coconico」（以下 Coconico）、「多文化・多世代のあそび捨てんきりん」（以下、てんきりん）と、参加者のニーズに合わせ、活動場所、時間、内容等が少しずつ異なる部門が誕生する。役割を分担する形でそれぞれ代表をおいており、独立して活動することも多いが一つの団体であり、まとめて地球っ子グループ（以下地球っ子G）と呼んでいる。地球っ子Gは、活動や対話中心であること、グループ活動であること、母語母文化を大切にしていること、それぞれの活躍を目指していることなど、共通の理念を持って活動している。

3. 背景：地域参加の捉えなおしと実践を支えた研究

1990年代から地域の日本語学習の場は一般市民が作るボランティア教室に委ねられてきた現実がある。そこで行われる日本語学習は、ほぼ日本語のみで成立するこの国にある言語観や、日本人が受けて来た言語教育の形を色濃く反映した、文法積み上げ式、マンツーマン

マン、文字指導に傾いた学習が主軸をなしてきた。

2010年代には、「地域日本語教室の5つの機能」(野山他 2010: 74 - 76)として、居場所、交流、地域参加、国際理解、日本語学習の5項目が挙げられ、また、「地域日本語教室では、日本語学習にのみ関心が払われ学習者の抱える多様な課題や多文化共生の視点にまで対応ができていない」(山西 2013: 5)ことが指摘された。さらに、2019年に日本語教育小委員会の報告で示された「日本語教育の参照枠」¹では、「日本語学習者を社会的存在として捉える」ことを言語教育観の柱として第一に挙げ、「言語の習得はそれ自体が目標ではなく、より深く社会に参加していくための手段である」としている。このように、地域日本語教育を日本語の枠を超えて社会と結びつけた形で考えようとする提言がされているのだが、具体的な方法が広まっているようには見えない。

一方、地球っ子Gでは、外国出身の仲間の母語・母文化を生かした多言語活動を図書館等での「おはなし会」という形で、地域社会に発信してきた。外国出身者が主役となり、日本人住民と外国人住民とがいっしょに活動し、おしゃべりし、笑い合う。よくある国際理解教育の講座では、共通点がたくさんあることよりも、結果的に文化や習慣の違いが協調される傾向にあるが、多言語活動は、たくさんの「同じ!」や「ちがう!」がちりばめられている楽しい活動であり、社会の理解を促す仕掛けとなりうるものである。「より深く社会に参加していく」ことは、外国出身者の努力だけでは実現しない。多言語活動は、既存の社会の側の意識の変容を視野に入れ、また、外国出身者の「地域参加」をもっと積極的に「活躍と社会参加」と捉えた実践である。

この実践は、外国出身者と協働する中で楽しい活動が生まれ、関わった人たちが生き生きすることで正当性を確かめながら来たが、さらにその根幹を支えた考え方がある。高柳和子を囲んだ勉強会²においてテーマであった「教えない日本語教育」「自分を語る力」

「共生と結びつけた日本語教育」は、筆者らの活動の中で、常にその意味を問い続けるものであった。また、地球っ子Gが実施した研修会(2013年文化庁の委嘱事業)³で春原憲一郎が示したものは、「日本語学習から始まりコミュニケーションの練習等を積んだ結果、活動ができ関係ができるという流れが基本の学校型教育に対し、地域の日本語教育では、言葉の獲得の矢印が逆である」ということであった。それは、地球っ子Gが教科書を使うことなく、体験を共にする活動を続けていく中で、子どもたちが元気になり言葉を獲得していくという実感と重なるところがあった。それを拠り所として実践を続けて行く中で、活動を繰り返すことによって関係性が進化していくという循環が生まれ、より深い関係性が築けると考えるようになった(図2)。

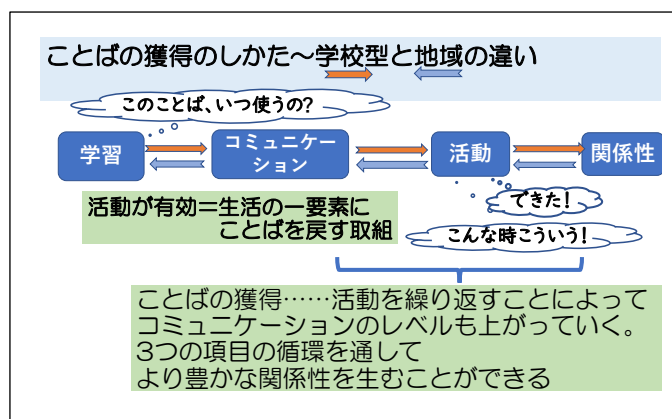


図2 ことばの獲得の仕方（春原の講義の内容から筆者が作成）

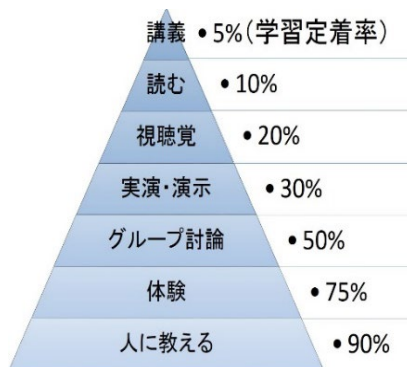


図3 ラーニングピラミッド

さらに、春原に教えられたのがラーニングピラミッドである（図3）。この学習定着率（％）については根拠がないものとして批判されているのは承知の上だが、日本語学習者に対して行う座学は効果が薄く、体験や、私たちの側が教えてもらう「立場の逆転」を仕掛けた時に、思いがけず楽しい効果が生まれるという実感と重なっていた。活動は、内容によって役割や立場が入れ替わったり得意なことが浮きぼりになったりと様々な場面を含んでおり、教える人と教えられる人といった関係は固定しない。自分たちが教えてもらうという「立場の逆転」を作り出すのに、もっとも身近で簡単な題材が相手の母語である。みんなの言葉を大切にすること、それぞれの母語・母文化に対する興味と敬意があったから、教えてもらう場面はいつも活動の中にあった。こうした基本的な姿勢が、対等の関係性を生み出し、日本語を超えた外国出身者の活躍を生み出す支えになったという認識である。

4. 実践と考察

この章では、ポイントを明らかにするために、4-1で「おはなし会」2つの事例（特

に、実践事例②は、来日後日が浅く日本語はまだほとんどできない状態で活躍した例）を示し、4-2 では、感想と観察記録をもとに実践の意味を振り返る。

4-1. みんなの母語・母文化による「おはなし会」～外国出身者から地域社会に発信！

2008 年、最初の「おはなし会」をさいたま市の南浦和図書館で開催した。図書館が広報を担当し、ポスターを見た地域の親子 30 名以上が観客として集まった。Coconico に参加していたママたちが、日本語の絵本『おおきなくま』や『わにさんどきつはいしゃさんどきつ』を手に、中国語やモンゴル語で話し、子守唄を紹介し、みんなで一緒に手あそびなどを楽しんだ。これは、子育て中の親子が車座に座って話す Coconico の活動の中で、常に絵本をその真ん中に置いていたことから生まれたものであった。絵本の中には、ママたちの文化や言葉につながる話題が豊富にあった。筆者たちは興味にかられ、「これ、〇〇語ではなんていうの？」と頻繁に聞いては、いろんな言葉や音を楽しんだ。日本人が見ても通り過ぎてしまう絵の中には、様々な国の文化が隠されていて、それをひも解いてもらってワクワクするのは日本人スタッフであった（例『かさどろぼう』ウェッタシンハ『ぼくのママが生まれた島セブ』他）。これは、もっとみんなに知ってもらわないともったいないという思いで図書館に話を持ち掛け、開催できたのが「おはなし会」である。この「おはなし会」は、観客である地域の人たちとの交流を積極的に作り出すワークショップを組み合わせるなど、内容と名称を少しずつ変えながら年 4 回の開催を続けている。

実践事例①：「同じってうれしい！ちがうって楽しい！」（大宮図書館 2022 年 8 月 20 日）

○言語・演者： インド・カンナダ語：D と来日中の両親

インド・タミール語：M と子ども 2 人

日本・鹿児島弁：O

○参加者： 地域の人 21 人（子ども含む）、図書館職員 3 人、スタッフ 3 人

○プログラム前半： 多言語によるおはなし会

- 1) みんなの言葉でごあいさつ…日本語、カンナダ語、タミール語、鹿児島弁。会場の参加者に、どこの言葉か当ててもらいながら挨拶を交わす。日本語から始まり最後は方言（手話の時もある）。鹿児島弁の時は「インドネシア？」などと声がかかった。
- 2) 『ねずみのよめいり』…鹿児島弁による紙芝居（写真 1）とインド、カンナダ語の語り（写真 2）
- 3) 日本の昔話としてよく知られている『ねずみのよめいり』とインドの説話『ねずみのよめいり』を紹介。あらすじは同じながら、違うところもあって興味深い。例えば、日本はネズミそのものの話で、父さんネズミが娘の結婚相手を決めるが、インドの話は、ネズミが人間の娘に姿を変えていて、結婚相手を決めるのは娘という違いに驚き。絵の雰囲気はもちろん別物。双方を見て「同じ／ちがう」が楽しいと実感。

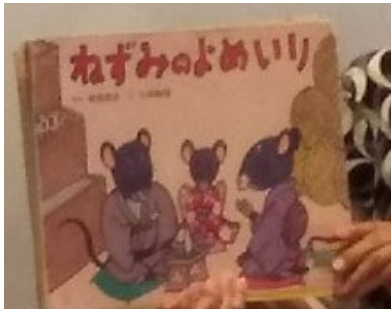


写真1 日本の昔話



写真2 インドの説話 ಇಮದುವೆ

4) 手あそび…M「ドーセイを食べた」、Dとお母さん「カンナダ語の手あそび」

○プログラム後半： ワークショップ「インド風のコースターを作ろう！」

DとMに教えてもらって、カンナダ語、タミール語の文字（写真3）で名前や好きな言葉を書いたり、伝統的なランゴリー模様（写真4）を描いて、インド風のコースターが出来上がった。

ま	は	な	た	さ	か
ಮ	ಹ	ನ	ತ	ಸ	ಕ
み	ひ	に	ち	し	き
ಮಿ	ಹಿ	ನಿ	ಚಿ	ಶಿ	ಕಿ
む	ふ	ぬ	つ	す	く
ಮು	ಫು	ನು	ತು	ಸು	ಕು
め	へ	ね	て	せ	け
ಮೆ	ಹೆ	ನೆ	ತೆ	ಸೆ	ಕೆ
も	ほ	の	と	そ	こ

写真3 インド・カンナダ語文字表（手書き）



写真4 インドランゴリー模様

○プログラムの最後： みんなの言葉で「さようなら＝またね」を交わしておしまい。

実践事例②：「同じってうれしい！ちがうって楽しい！」（大宮図書館 2023 年 10 月 8 日）

○言語： コンゴ民主共和国・フランス語とリンガラ語：NとD16才、小5、小2、年長
チュニジア・ペルシャ語：R

鹿児島出身・鹿児島弁：O

○参加者： 地域の人 21 人、図書館担当者 3 名、見学者 1 名、スタッフ 3 人

○プログラム前半 多言語によるおはなし会

1) みんなの言葉でご挨拶…日本語・フランス語・リンガラ語・ペルシャ語・鹿児島弁



写真5 アラビア語で朗読

2) 読み聞かせに人気の絵本をアラビア語で楽しもう！

『くだものなんだ』は繰り返しの多い日本語の絵本。

『ハンダのビックリプレゼント』ケニアの絵本。

3) いろんな言葉で、お話を聞こう！

『はらぺこあおむし』日本語版 鹿児島弁で0の語り

『はらぺこあおむし』フランス語版 Dの朗読

『くじゃくとおんどり』アラビア語の絵本 Rの朗読 (写真5)



写真6 アルゴリズム体操

4) 手あそび・歌あそび

鹿児島弁『茶碗むしの歌』、フランス語・アルゴリズム体操

『main droite main gauche pied droit pied gauche 右手・右足・左手・左足』

子どもたちが前に出てリード (写真6)。

自分の言葉で表情豊かに生き生きと語りや朗読や手あそびをを披露。会場みんなで楽しむことができた。

○プログラム後半 ワークショップ「おしゃべりしながら小さい本を作ろう！」

チュニジアコーナー (R) では、アラビア語で自分の名前を書いたり、コンゴ民主共和国コーナー (N ファミリー) はで、じゃんけん？をしてもらったシールを貼ったりして小さい本を完成。図書館が用意した絵本を見ながらおしゃべりも弾んだ (写真7)。



写真7 ワークショップ風景

<プログラムの最後>

『おんなじおんなじでもちよつとちがう』アメリカの男の子とインドの男の子が文通で自分のことを話す。おんなじこともちよつと違うこともたくさんあって、うれしい、楽しいという絵本を日本語で読んだ後、みんなの言葉でさようなら。

4-2. 感想と観察による考察

外国出身者と地域の日本人が直接触れ合う体験を通して、私たちは次のようなポイントを実現したいと考えていた。

(1) 外国出身者のエンパワーメント…外国出身者が、母語でのおはなしや固有の文字や

文化を楽しむ晴れの舞台での達成感を力に自己肯定感を取り戻すこと。また、観客の声援を受ける親の活躍を見た子どもたちが自分のルーツに誇りをもつこと。

- (2) 地域の一般市民の気づき…外国出身者自身の活躍を通して、地域の外国出身者と一般市民がいっしょに楽しむ機会を作り、外国人市民を身近な存在と認識すること。
- (3) 多言語の中に手話または方言を取り入れることにより、外国と日本という2項対立の意識を変え、多様な個人の尊重に気づくこと。

上記のポイントを念頭に、参加者の感想と観察記録をもとに本実践の意味を振り返ってみる。

「文字の違い、色彩感の違い、初めて知っておどろくことばかりでした（50代）」「たみーるごたのしかった（6歳）」「自分の名前をタミール語やカナダ語で書いてよかった（30代）」「お話しながらのワークショップ楽しかった（40代）」「講師が話すという形でなく、お友達感覚で参加できて子どもたちも楽しんでいたよかった（60代）」

以上の感想に見るように、セットで企画しているワークショップの意味が大きいことが分かる。地域で暮らす外国出身の人が増えていても、実際に交わる機会も知る機会もほとんどない中で、ワークショップで教えてもらわないと作れない仕掛けが、話をするきっかけとなっている。何より、楽しかったという感想が多かったことから、市民同士としての意識を作り出す効果があったと考えられる。

「子どもたちも、インドに興味を持つ人があんなにたくさんいたのを見て、自分の国のことをもっと好きになるのかな、と思った（40代）」「子どもたちも、恥ずかしがりながらも、自分たちの力を発揮していたみたい（70代）」

この日、Mの子どもS（小2女子）とP（年長男子）が、みんなの前で活躍するママの姿を見ていた。1年前に初めて参加した頃のSは、すでに、自分のルーツに触れる言葉などを避けている気配があった。地球っ子クラブの活動では、会の終わりに、参加者みんなの言葉で「サヨナラ」を交わすのだが、Sはタミール語の「ポイトワレン」を言おうとしなかった。Sのように、日本社会の中で、なんとなく自分のルーツの言葉を封印してしまう、さらには否定してしまう子どもは決して少なくない。子どもたちが自分のルーツに誇りを持つためには、当事者の親子の努力だけでは実現は難しい。ママに笑顔で大きな拍手を送る日本人の姿が力になるということ、このおはなし会は証明してくれる。母語の問題は、長じて親子関係にも影響を及ぼすが、それ以上に、アイデンティティの確立やその子らしさを実現していくために不可欠な支えである。この感想は、そうした子どもの側の気持ちを想像したものと捉えられる。母語教育はできなくても、周りの日本人が楽しむことで、母語やママへの誇りを保持する支えになると考えられる。

「自分で名前を書いてみて、読んでもらえた時も嬉しくて、国、年齢に関係なく、自分を認識してもらえて、すごく嬉しいことなりました（40代）」「文字の違う世界で、読む、書くことがいかに大変かも実感しました（40代）」

これらは、普段と逆の立場になったことにより、相手の気持ちを実感したことからの気づきが伺える感想である。こうした感想から、この催しには、楽しみながらホスト社会の変容を促す可能性を示していると考ええる。

「日本に来たばかりなのに日本語が上手でびっくりした（60代）」

これは、実践事例②のおはなし会での感想である。実際にはほぼ単語レベルの日本語しか話していないにもかかわらず、様々な方法を駆使して共に活動した結果、コミュニケーションが成立したという実感があつたのだろう。「日本に来て何もできない人になったような気がした」という来日者の証言があるが、日本語ができないだけで、今までの人生で獲得した力を豊かに持っている。日本語ができないために見えてこない、本人も見失ってしまった力があるはずで、日本語ができるようになったら～という時間が長ければ長いほど、見失った自信を取り戻すことは難しくなってくる。日本語ができなくても活躍～という逆の流れにより日本人側への働きかけにもなった。

「Mさんが、日本語がすごく上手になっていてびっくりしました。彼女はシャイで、あまり話さない人だったから」

これは、Mが以前通っていた某日本語教室のスタッフの感想である。確かに、最初に会った時のMは表情も硬く日本語もあまり出て来なかった。しかし、地球っ子Gの活動に参加し、仲間もでき、自分のことも話すようになって、この日は、観客を前にして自分の言葉を紹介したり、手あそびをリードしたりして、拍手を浴びる存在になっていた。ワークショップでは、参加した人たちに囲まれ、日本語でタミール語やランゴールの書き方を教えながら笑顔で談笑する姿があった。

「鹿児島弁で昔話をすると、すごく楽に話せるのよね。鹿児島から東京に出てきて、田舎の言葉という劣等感みたいなのがあって人の前で使うことはなかった。でも、今は、こうしておはなし会なんかに出て、自分の宝だと思うようになった。方言で語りをするようになってから気づいたんだけど、外国の人にとって母語が大切なのおんなじ」

0は、普段の暮らしの中で出生地の鹿児島弁を使うことはない。てんきりんの絵本を読み

合う活動の中で、外国出身者がさまざまな母語で『おおきなかぶ』をお話するように、周りから促されて『おおきなかぶ』を鹿児島弁で語ってみるうち、自分が生き生きと語りができることに気づいた。自分の母語を使っていいんだという実感を持つことが自分らしさを取り戻すために大きな力になっているということを、Oの語りが示している。Oの鹿児島弁語りは、昔話を語るボランティア活動にまで発展している。

国際理解教育などで、様々な国の話を聞く機会はあると思うが、日本人側の受け止め方が、違いを知りたがる傾向があることが気がかりである。国や言語や文化が違って同じこともたくさんある。そして、同じだねってことは「うれしい」ことにつながる。はじめて会った人と誕生日が同じだとわかったら理由もなくうれしい。距離が縮まる。多言語活動には、「同じ」と「ちがう」がたくさんちりばめられている。そして、何度も繰り返すが、周囲の人たちに自分の言葉を受け止められ、周りの人を楽しませることができたと感じた時、気持ちがほぐれ、社会参加の第一歩を踏み出す。一般市民に向けたおはなし会での多言語活動で、お互いの距離は縮まり、言葉の上での対等の関係が生まれる。多言語活動を進める理由はここにある。

5. 外国出身者の社会参加と日常の日本語活動の実際

ビジネス、留学、専門職など、積極的な意思を持って準備をし、所属する場もあって来日する人材がいる一方、帯同家族は、言語的にも社会のつながりの無さからしても、その生活はゼロからの出発になる。「日本語ができるようになったら～」を前提としていては、本来持っている自分らしさや能力を発揮するようになるまでにどれほどの時間と努力を要するだろう。地球っ子Gでは「今の日本語で」その人らしく社会で活躍するきっかけをつかんでもらうために、日常の活動の中でそれぞれのいいところを見つけ活躍の場を作ってきた。その中の一つとして「おはなし会」を取り上げてきたが、この章では、日本語の獲得を超えて活躍をめざすようになった経緯と方法について振り返ってみる。

5-1. Gさんから受け取ったメッセージ「人はだれでもありがとうと言われたい！」

ベトナムから来日して4人の子どもの育てていたGとは、埼玉県国際交流協会の紹介で知り合った。てんきりんでは、にほんご活動の後、持参したお弁当と一緒に食べることが普通だったが、Gは、みんなのために生春巻きなどのベトナム料理を作ってくるがあった。そんな中で、子育てや教育、病院のことなどの相談を受けたり、こちらが自宅を訪問するような関係になっていた。来日したのが40代半ばであったから、なかなか日本語の力がつかないのは無理もないことだった。

ある時、地域の老人クラブから、外国の人のお話が聞きたいという依頼を受け、通訳のできるベトナム出身の大学生を伴って、Gと出かけた。会の最後に「日本が好きですか?」という質問があり、「大好きです!」と日本語で答えた彼女がベトナム語で続けたのは「大好きですが、私は日本語ができないので皆さんの役に立てないことが悲しい」。いつ

もニコニコして「ありがとう1ありがとう！」と言っていた彼女。でも、本当は「ありがとう！」と言ってほしかったんだ！と気づいた一瞬だった。

国にいた時は、看護師として活躍していた彼女。「ありがとう」と言うばかりでは元気がなくなってしまうだろう。ならば、私たちが「ありがとう！」と言う場面を作り出そう！

早速、みんなで声をかけあって「Gさんのベトナム家庭料理の日」が実現した。地域の人も集まり、Gに教えてもらいながらみんなで生春巻きを作った。日本語が十分できなくても、晴れの舞台でGは生き生きと輝き、みんなからは自然に「ありがとう！」が出た。

5-2. 晴れの舞台に向けたエンパワーメントのプログラム

「日本語ができるようになったら～ではなく、今の日本語で～」 「人はだれでもありがとうと言われたい！」というGから受け取ったメッセージは、地球っ子Gの活動の中に生き続けている。具体的には、日本社会で本来の力を十分発揮できずにいる外国出身者の自己実現を最終目的とし、自分らしく生き生きと暮らせるようになるために活躍の場・晴れの舞台を作って来たが、ここで、どのようなプロセスで活躍を生み出しているかを報告する（図3参照）。

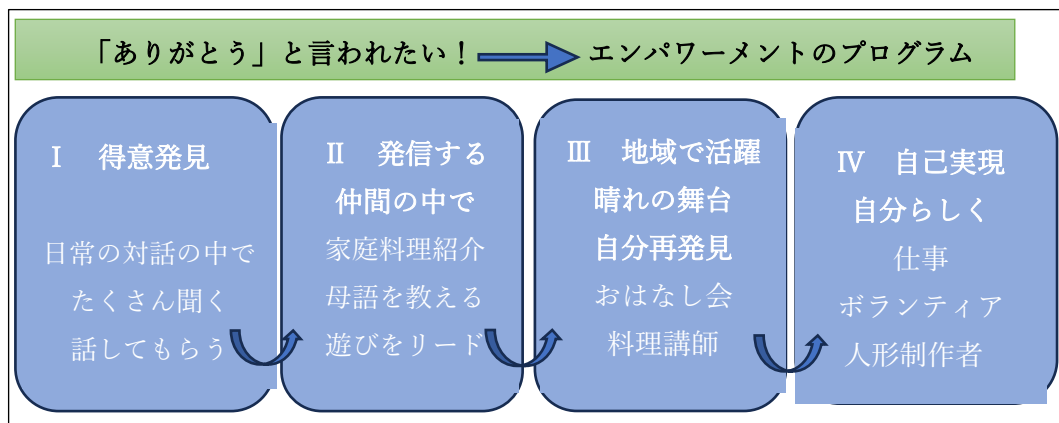


図3 エンパワーメントのプログラム

自己実現（IV）を可能にするためには、その前に日本語社会の中で封印した自分らしさを取り戻すことが必要であり、地域の晴れの舞台で活躍すること（III）が大きな力になる。そして、地域で活躍するためには、仲間の中で自分らしさを発揮する力を付ける段階（II）が必用である。それを実現するスタートとなるのが日常の地球っ子Gの場（I）であり、その中で、一人一人のいいところや得意なことを見つけることは筆者らの楽しみである。エンパワーメントのプログラムは、そうした逆向きのプロセスを表しており、IIIに当たる「おはなし会」等を実現するためには、1の日常活動の中でそれぞれのいいところを見つけることがキーポイントとなる。

5-3. 日常の活動から見つけるみんなのいいところ～発話を促す仕掛けと対話力

外国出身者の自己実現が達成されるためには、図3に示す1で十分な効果を得る必要があり、それは、もっぱら日本人側の対話の力にかかっている。ここでは、それぞれの母語・母文化を大切にした活動と仕掛けがうまくいっている具体例を示したい。

5-3-1. にほんご畑における多言語活動

にほんご畑とは、「いろんな日本語の種をまいて、たくさん話して種を育て、いろんな色の花やおいしい野菜が育つところ」。みんなで名称を考えるうちにモンゴル出身の仲間から出て来たアイデアである。にほんご畑では、日本人が日本語を教えるという意識はなく、みんなで集まってにぎやかに話し「同じってうれしい！ちがうって楽しい！」が実感できて、みんなのいいところがたくさん発見できる場である。ここから生まれた多言語活動から、発話とは？対話とは？を考えてみたい。

実践事例③：イメージビンゴ～みんなの持っているイメージを出し合って楽しむ～

一つのお題に対し、参加者のイメージを出し合って楽しむ遊び。浮かんだ言葉を付箋5枚に一つずつ書き込む。言葉がわからなければ絵でも母語でもいい。そのあと、順番に付箋を出していく（写真8）。同じものがあればビンゴ！（＝おんなじ）と言って出す。どうして？と不思議に思うものがあればその場で質問したり応えたり。

ある日のイメージビンゴ。お題は「スイカ」。出て来たイメージは、赤と黒と緑、縞模様、夏休み、おばあちゃんの家、どろぼう、太極拳などさまざま。



写真8 イメージビンゴ

「おばあちゃんの家」に対する質問には「夏休みにおばあちゃんの家に行っていた。スイカを作っておやつに食べた。鶏を飼って、池があって、バナナを食べにサルが来る。おじいちゃんが勉強を教えてくださいました」と生き生きと自分を語る姿があった。

また、「太極拳」については「スイカの歌を歌いながら太極拳をした」。本人の説明によればなんちゃって太極拳だというが、みんなで歌を歌いながら、にぎやかに太極拳を楽しむことになった。

実践事例④：ある日のにほんご畑～Nを囲んで～みんなの国の子守歌の話 2025 年

参加者 G (中国)、D (インド)、F (フィリピン)、N と D (コンゴ民主共和国)

H、I、K、B、筆者 (日本)

1) 前回 F が絵が得意なことがわかったので、前回不参加のメンバーに F の絵を紹介。

2) N が D を抱っこして ZOOM に入ってくる。

みんなが口々に「D ちゃん大きくなったね!」「何キロ?」

N の「13 キロ」という答えに、「大きい」とか「自分の子は…」とか。

K: N さん、母子手帳ある? 他の人も持って来て。

I: うちの息子は 1 歳の時〇キロだった……。誕生日はいつだっけ?

3) 「N さん、この間の子守歌歌って」筆者の言葉で話題が展開。

N: コンゴの子守歌 ♪フェー ボーボー ダレーヌ フェー ボーボー

みんなは、「ダレーヌはわかった!」「フェーはどういう意味?」「もう一度お願い!」

4) 他の参加者も次々に歌ってくれる。みんなよく知っている。

D がインドの子守歌、F がフィリピンの子守歌を歌う。G が歌い出して「これ、中国の歌じゃないね!私は、童謡をゆっくり歌った」F「私、韓国語の歌もできます!」

N「私、リンガラ語」(公用語はフランス語、母語はリンガラ語)

日本の子守歌、さびしい!どうして?いろんな国の子守歌、ステキだね。子守歌コンサート開きたいね!

5-3-2. 感想と観察による考察

「太極拳」の時は、「なんでスイカから太極拳が連想できるの?」といった疑問から、スイカにまつわる太極拳があることを知り、みんなで太極拳を真似しました。そこで連想されたものは文化的な背景や育ってきた環境が反映されており、同じものがあれば「うれしい」と感じ、異なるものを連想すれば「どうして?」という疑問が生まれ、経緯を知りたくなりました。そして、新しい発見が生まれて「たのしい!」と感じました。会話やゲームを通して、文化や育った環境についてお互いに知ることができました。

ひとつのお題に対してたくさんのイメージが出てきていた様子を見て、今まで「日本人」「外国人」と区別してしまっていたことに気付かされました。「日本人」は同じような考え方で、「外国人」は違う考え方をしていると無意識的に分けて考えていた気がします。今日の活動を通して「日本人」だからといってみんな同じ訳ではなく、それぞれ違った考え方をされていて面白いなと思いました。

これは、にほんご畑に参加した大学生の感想である。直接語り合い楽しむ体験を通し

て、それまで頭で理解していたことの思い込みや不完全さに気づき、実感に変わって行ったことがうかがえる。地域の日本語教育の中で大切だとされている対等の関係を創ることは、日本語にこだわっている範囲では難しい。こうした協働作業ともいえる遊びを通して、日本人側が、互いの言葉や文化を楽しむ力を身につけることが必用ではないか。こうした場で日本語が十分でない人が一生懸命に自分を語りだすことがあるが、日本人側の変容こそが、外国出身者の発話を引き出すものではないだろうか。

実践事例④の中では、I、Kは、積極的に問いかけたり、自分のことを話したりしてみんなの話を引き出している。筆者は、話の流れを見ながら、話の展開を試みている。雑談から入り、その流れを汲んで深堀する。発話を引き出し、対話を重視し、みんなのいいところを引き出そうという考えに基づく仕掛けである。こうして得たそれぞれのいいところを晴れの舞台に結び付けていく。必ずしも日本語ができるようになってからではなく今の日本語で、自分が蓄積してきた力を地域社会で発揮し活躍することをめざしたこれらの実践が、さらに、本来の力を引き出し、その人らしく生きるためのきっかけになっていることを示す何人かの語りを紹介する。

「日本にきたから今の自分になれた。国にいたらこんな風になれなかったと思う」

(韓国出身…てんきりんで行うキムチ作りは年中行事となり、地域の人も楽しみにしている)

「日本に来てよかったことは、てんきりんのHさんの紹介で、この仕事ができたと」(インドネシア出身…埼玉県国際交流協会のトビラ事業の講師)

「もらったお金は、大切に飾っておきます」(中国出身…地球っ子の研修会で当事者として発表)

「もらったお金は国に寄付します。終わった後、みんなでケーキを食べたのが楽しかったから」(ミャンマー出身…小学校のチャレンジスクールで発表と多言語活動)

「地球っ子では支援ということばは聞いたことがない。いろいろお世話になっているのに、みんな反対にありがとうという。こんなに活躍できてしあわせです」(中国出身)

5-4. 外国出身者の社会参加の視点から～活躍による日本社会側の気づきと変容

「おはなし会」の大きな目的として、地域社会(＝ホスト社会)に向けたメッセージがある。多様な人たちそれぞれの母語を通して地域の人たちとひとときを共に楽しむという仕掛けの中で、日本人側が、隣人または仲間としての外国出身者の存在に気づき、共生社会を作っていく力になっていくことを期待している。

外国出身の市民が増えているとはいっても、地域社会では両者の接点がなかなかないのが現実である。接点がないのでは、多文化共生の推進と言っても言葉だけに終わってしまう。

社会にある壁を取り除くためには壁の両側にいる人の協働作業が必要であるし、その役割はマジョリティーである日本社会の側に大きいはずだ。

そうした日本社会側の変容を促すために、外国出身者が主役となる多言語活動を通して協働して来た。外国出身者の地域参加とは、本来持っている豊かな能力を発揮するという積極的なものでありたい。この取り組みを通して、外国出身の仲間は、本来の豊かな存在として社会に働きかけることができた。日常の活動の中で見えた外国出身の仲間の豊かさと力を信じた結果である。

外国出身者は決して支援される人ではない。東日本大震災後、外国出身者が情報弱者としての側面からのみ報じられていることに危惧を示し、彼らと協働して行った被災地への支援活動の実践（宮崎 2012）に深く共感する。

「日本語教育の参照枠」の中で言われている社会的存在とは、決して、地域の自治会やお祭りに参加することだけでなく、日本語教育の枠を超えて、日本社会の一員としてその役に立つことを意味していると思いたい。加えて、言語を獲得する目的は、生活上のできることを増やすことだけではなく、自分の声を発信することがさらに上位の目的とされるだろう。本来、外国出身のすべての人は、母語・母文化という宝を持っている。多様な言語的文化的背景を持つ存在としての自分を社会に向けて発信するために、「学んだ日本語を使って」ではなく「今の日本語を使って」それぞれの母語・母文化を生かした積極的社会参加を実現することができるし、それを支えるのは日本社会側の意識であることを強調したい。

6. 多文化共生の街づくりへ～地域社会の変容の重要性と啓蒙活動としての多言語活動の可能性

外国出身者は一方的に支援される存在ではない。また、たとえ日本語が十分でなくても、積極的社会参加をすることができる。それを可視化するために晴れの舞台を作り、母語、母文化を生かした多言語活動を発信して来た。外国出身者の母語を生かした多言語活動は、以下のような効果が期待されていた。

- (1) 母語の尊重を通して、アイデンティティを支える力
- (2) 日本人側が、わからない体験 異なる立場を体験できる場
- (3) 多文化の背景を持つ親子に送る温かい地域のまなざしの力
- (4) 対等の関係を生み出す仕掛け
- (5) 同じってうれしい。ちがうって楽しい～多文化共生の合言葉～が実感できる場

(1) が外国出身者のエンパワーメント、(2)(3)が日本人側の気づきと理解、(4)(5)が日本社会の変容という課題につながるものと考えられる。

多文化共生を実現するための対等な関係と言いつつも、圧倒的に日本語優位な社会の中で、その関係性を築くことは言語的に既に難しい。しかし、相手の言語（外国語でも手話でも、方言でも）に触れ、その言語を使っている人の現実に触れれば、世界には自分が知

らない多様な言語があることに気づき、その話者に魅力や親しみを感じることが可能であることが実践から示せたかと思う。外国出身者にとっての母語、聞こえない人にとっての手話、自分を表現するという意味では方言も含めて、さらに非言語のコミュニケーション能力のすべてを生かすことによって、その人なりの言葉で活躍できるということを「おはなし会」をはじめとした多言語活動の実践から示したかった。

日本語優位な日本社会の中で、日本で暮らす外国出身の人が母語・母文化を個人のレベルで大切にすることは決して容易なことではない。アイデンティティを支えるために母語支援や母語教育が必要であることは語られているが、しかし、その多くは子どもを対象としており、多様化する言語環境の中で、また、日本語支援もまだ十分でない中で、いまだに母語教育の体制は整う方向に進んでいないし、安定的な実現には様々な課題がある。高橋（2015：331）は、対象者、指導者に関する課題6項目をあげた上で、7つ目として多文化や複文化を受容する社会の育成に言及している。外国出身者は、日本語優位な社会の中で（時には家庭の中でさえ）、大人も子どもも、しばしば自分の言葉を封印する方向に動く。また逆に、母親が自分の言葉を熱心に教えようとして親子関係が壊れた例も見ている。筆者らは、外国出身者を主役とする「おはなし会」の中で、母語・母文化とそれにつながるアイデンティティを取り戻すために、観客である日本社会側から受ける認証とレスpektが大きな支えになることを実感してきた。「おはなし会」が始まった時は母親の中国語に耳をふさいでいた子どもが、参加者から拍手を浴びる母親を見て「ぼく、中国語知ってるよ!」と、その場で変化した子どもも見た。ほかにも、活動の後で、その言葉ができることを嬉しそうに告げに来る子ども達にも多く出会った。これらの意味するところは、外国出身者や外国ルーツの子どもたちにとって、周りの認証がいかに大切かということであり、これは高橋が指摘する社会のありように共通する。野山（2011：165）が例示している母語を教えることによって得た気づきの蓄積が自尊感情につながった例についても、自身の母語を使う活躍の場があったことに繋がるのではないか。

こうして仕掛けられた言葉の優劣がない状況の中で、自分の言葉への日本人からのレスpektのまなざしを感じるのが、母語・母文化、自分自身への誇りを取り戻す力になることを示してきた。それを支えるのは日本社会であり、中でも彼らと直接接する、日本語教育関係者や学校関係者の関わり方は重要である。日本語そのものにこだわってはい対等の関係は生まれない。多文化共生や、多様性の理解を推進することが教育の目標にあるのであれば、身近に暮らす外国出身者の力を生かしていくことこそが大切であろう。さいたま市子ども教育センターとの連携で開いた「おはなし会」に参加した大学生と手話話者の感想から、多言語活動を生かした晴れの舞台が、参加した人たちの心を動かし変化と関係性を生み出した様子を感じ取っていただきたい。

「外国ルーツの方たちがメインになって何かをするということは大切だなと感じました。去年、大学生が主体になってイベントをした時に感じたことですが、大学生だか

らこそできることがあり大学生にしかできないことがたくさんあると感じました。それと同じように、外国の方たちにもその人たちにしかできないことがあって、それをする事で自分の居場所作りに繋がったり、自信に繋がったりするんじゃないかと思いました。どのブースでも皆さん輝かれていて、とても素敵だなと思いました！

「驚いたのは、外国の皆さんも手話ブースに来てくださり手話を体験してくださったこと。言葉が通じなくて辛い思いは、外国の方も『その気持ちわかる』とおっしゃってくださっているようでした。ウンウン、だよね。私だって、旦那は聞こえる人だから国際結婚した気分だもん。おはなし会があり、たくさんの人の前で手話クイズ(ゾウ、猫、ウサギとかね)も盛り上がって楽しかった。

みんな地球人だもんね。住む場所が違うだけで。今度は息子の祐太も連れていく～

「おはなし会」を中心とする多言語活動は小さいものであるが、小さいからこそ、いつでも、どこでも仕掛けられるものであり、地域の外国出身者と日本人の接点を提供するものである。そして、日ごろ接点が希薄な両者が活動を共有することにより、互いの距離を縮め当たり前の隣人になっていくことを期待する。そして、その仕掛けの中心でスポットライトを浴びるのが、日ごろ支援される存在と思われがちな外国人市民であることが肝心だ。参照枠が日本語教育の中心に置かれるようになってきたが、その基本的理念である複言語・複文化よりも「共通参照枠」の方に関心が偏っている(山川 2019: 7)ことは残念である。複言語・複文化をホスト社会に働きかける仕掛けとして、この小さな多言語活動を広めたい。

日本人も外国人もいっしょに活動し、笑い合い「同じってうれしい！ちがうって楽しい！」を互いに実感する場は、多くの気づきと対等の関係性を生む。日本に住む外国出身者一人ひとりのアイデンティティを支える母語、それも多様な言語を楽しむ多言語活動という仕掛けは、外国出身の仲間のエンパワーメントを超えてホスト社会に働きかける力になり、日本人側の気づきと理解を促す力になった。こうした相互作用のある多言語活動を通した外国出身者の社会参加が、学校、地域の啓蒙活動としてもっと活用されることを願っている。

註

1. 文化庁審議会国語分科会日本語教育小委員会日本語教育小委員会の報告で示された「日本語教育の参照枠」ここでは「日本語教育の参照枠」一次報告令和 2022-11-20 を参考にしている。
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/92664201_01.pdf (2026 年 1 月アクセス)
2. 高柳和子を囲んだ勉強会 1995～2003 高柳和子は TIJ 東京日本語研究所所長。「教え

ないこと、自分を語ること、共生」をテーマに教材作りや実践を取り入れた自主的な研究会

3. 文化庁「生活者としての外国人のための日本語教育事業」（2013 年度地球っ子クラブ委嘱）の取り組みとして行われた人材育成事業での講演「かかわることはかわること」を指す。本文中図 2 は、この時の講演をもとに筆者が作成したものである。

[参考文献]

- 高橋朋子, 2015, 「日本の母語教育の現状と課題」『Canadian Association for Japanese Language Education. 』, pp. 330-339
- 地球っ子クラブ 2000, 2020, 多文化の子どもたちに関わる人のためのアイデア集「今日からいっしょに」改訂版, 文部科学省日本語教育コンテンツ共有システム
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/
- 宮崎妙子, 2012, 「市民活動を創る」ー日本語学習支援コーディネーターの立場からー, 『東京外国語大学』東京外国語大学学術成果コレクション, pp. 52 - 64
- 日本学術会議 地域研究委員会 多文化共生分科会, 2014, 「外国人は助けるべき存在なのか」『教育における多文化共生』9 月 1 日
- 日本語教育小委員会, 2019, 「日本語教育の参照枠」
- 野山広他, 2010, 「地域日本語教室の 5 つの機能と研修プログラム - 豊かな学びと人間関係づくりを目指して」『共生のまちづくりに向けた地域日本語教育プログラム』
- 野山広, 2011, 「5 章 地域日本語教育の展開と複言語・複文化主義」『開かれた日本の構想』ココ出版, pp. 148 - 181
- 山西優二, 2013, 「エンパワーメントの視点から見た日本語教育」ー多文化共生に向けてー『日本語教育 155 号』, pp. 5-19
- 山川智子, 2019, 「日本の言語教育における『複言語・複文化主義』の位置づけ」『文教大学文学部紀要 31-2 号』, pp. 1-25
- 山室博文, 2001, 「母語・母文化を大切にする日本語指導ー取り出し指導の場合ー」お茶の水女子大学第 3 回国際日本学シンポジウム 新しい日本学の構築Ⅲ (2001 年 7 月) 特別企画: 地域から創る多言語・多文化共生社会

使用した絵本のリスト

- ※印以外のものは、日本語の絵本の内容に沿ってそれぞれの母語でお話したものです。
- アイリーン・ブラウン作・絵, 福本友美子訳, 2006, 『ハンダのびっくりプレゼント』, 光村教育図書
- A・トルストイ再話, 内田莉沙子訳, 佐藤忠良画, 1966, 『おおきなかぶ』福音館書店
- エリック・カール作, フランス語版, 『はらぺこあおむし』, 偕成社 ※フランス語
- おおともやすお絵・文, なとりちづ文, 2010, 『ぼくのママが生まれた島セブ - フィリピン』

ン』福音館書店

五味太郎作絵，1984，『わにさんどきっはいしやさんどきっ』偕成社

五味太郎 WORKSHOP，2010，『挨拶絵本』株式会社ブロンズ新社

ジェニー・スー・コステキ・ショー作，宮坂宏美訳，2011，『おんなじ、おんなじ！でも、ちょっとちがう！』光村教育図書 ※日本語で読み聞かせ

シビル・ウェッタシンハ作・絵，いのくまようこ訳，2007，『かさどろぼう』徳間書店

きうちかつ作・絵，2007，『くだものなんだ』福音館書店

B ボリス，1979，『雄鶏はなぜ一日に3回鳴くのでしょうか』※アラビア語